



釣りをする僕の傍らには常に仲間がいた。これからも『釣り人の絆』を大切にしていきたい。

小学生の頃、夏休み、冬休みの月曜日が楽しみで仕方なかったことを今でもよく思い出す。親父と釣りに行く予定の前日なんて、お腹が痛くても、頭が痛くても、黙って我慢してた。なぜそんなことをしてたかって？そりゃ、釣りに行くためですよ(笑)。僕で三代目となる稼業・散髪屋の定休日には月曜日。学校が休みじゃないと釣りに連れてって貰えないのは当然で、だから夏休み、冬休みの月曜日というわけ。

その時が楽しみで楽しみで、仮病の逆だまよたく！お腹痛しても隠れて正露丸飲んで知らん顔してたなあ。特に遠征(行き先はこの時から高知が主だった)の時なんて、何が何でも連れてけえ、状態だった。二度、学校の行事が親父の出発の時間と合わなくて、後から汽車(当時はディーゼルエンジンの汽車だった)に乗って宿毛まで追いかけたことを覚えている。それ程、釣りが好きで、親父に連れて行って貰うのが好きで、道中のご飯が楽しみで、船宿の女将さんがくれるお年玉が楽しみだったのをこれを書きながら思い出してるところだ。そんな体験は間違いなく今の僕の釣りの原点になっている。そして、あの頃から月曜日に釣りをしたんだなあと思えば返すと面白いもんである。

稼業を継いで20年の時が過ぎた。この歴史とほぼ同じだけシーバスとの時間が在る。「月曜日」のみに留まらず、ほぼ毎日釣りしてたのだが、決して義務でも情性でも無く、ただただ毎日が楽しく、一匹のシーバスと出会うことに楽しさを覚えていた。ただ僕の場合、少々寂しがり屋であるが故に、誰かと一緒に釣行がほとんどで、携帯の無い時代などはフィールドにシーバスを探しに行くのだけど、むしろ釣りをする友達の影響で行っていたのかも知れない。家族との時間ももち

ろん大切だったし、大事にしてきたと思っている。でもそれは個人の勝手な解釈で、妻には大きな苦勞を掛けていたのだと、今は素直に反省している。妻に稼業を手伝って貰っていることもあり、仕事中に話をする時間も多くなったので、今までは「か」釣り人、濱本国彦」を温かく見守ってくれていたんだと思う。

おっと：話がそれた。月曜日の釣りを振り返ると、平日なのに何時も誰かが一緒に釣りに来てくれた僕の釣り人生。休みを合わせてくれた友達、同じ定休日の友達、たまたま休みになった友達、そして親父。シーバスを始めた頃、今思えば親父とも一緒にガン行ってた。40代だったあの頃の親父、11フィートのシーバスタードを片手に一緒に並んでよく釣りをしたもんだ。当時、まだまだシーバスに出会えるチャンスが少なく、キャスト回数1シーバスに出会える確率で、とにかく投げる！というスタイルだった。そんな親父も今は歳を重ねて足だの腰だの、痛い所も増え、船釣りに収まっている。多分僕も、後何十年後には穏やかな瀬戸内海で糸を垂らしてらんだらうと思うこともある。そんな良きお手本となっている親父。決して真似してる訳じゃないけど、影響を受けているのは確かなんだな。と、ひとつの事にどうぶりのめり込み込み突進親父の姿を見てきた延長線上に今の僕がいるんだなと、改めて思う。

月曜日の釣りには「笑顔」があり、「出会い」があった。シーバスのみならず、磯のフカセ釣り、川のアユ釣り、池のブラックバスに雷魚。色んな釣りに費やしてきた数十年。決して一人ぼっちじゃ無かったことがホントに有難い。僕は二人が嫌いだっただけで誰に対しても常にウェルカムな状態だったと思う。「一緒に行く?」「月曜日や?」「的を3アンス



を常に出しつつ(笑)誰かを誘っていたよ(笑)と思う。結果、ジャンルに関わらず肩を並べて釣りをしてくる友達が多く増えたことに繋がったと思う。それが今でも「絆」として残っていて、これからも繋がっていきくと信じている。

そんな「繋がり」的な話をすると、やっぱりS.W.A.P.の話になるだろう。初めてこのパーティーを計画した2008年、横浜のフィッシングショーで不意に感じたことだったのだが、メーカりのブースに集まってくるお客様は同じ趣味を持ち、フィールドも恐らくそんなに遠くないはず。もちろん、遠方の方の中にはいらっしやるだろうがそれならば尚のこと、ステージに上がってる僕らに目を向けるだけでなく、同じトクショーを聞いている隣の人と会話ができたり、もし友達になれたら...、遠征先に知り合いがいたら、どんなに楽しいだろう?と感じたのである。ただ、そのためには具体的に何かできるか?

大それたことができるわけではなく、考えるだけ無駄か?とも思ったが、田舎のおっさんができることと言えば「忘年会」くらいか。毎年友達を集めて仲間内でやる忘年会を大きくしてみようと思いついた。「香川にソルトやってくる人って体何人いるやろ?100人位かな?」友達に相談したら、やろうぜえ!的なノリになってしまった(笑)。

それから海上保安署への打診をしたり、各メーカーへ説明をして理解を求めていった。周囲の反応は賛否両論。酒の席で?実釣無しで?何が生まれるの?という御声も頂いた。だが不思議と落ち込むこともなく、ただただ前向きに進み続けられたのは、最初から応援してくれた人がいてくれたからだと思ふ。RED中村君に「どうにか来れないか?」と打診をしたところ「面白そうだから何とかするよ!」と返ってくれたことをよく覚えている。嬉しかったなあ!主催の本人でさえこんなことになるか想像もできていない2008年の6月頃のこと

だった。今、思い返してもただの忘年会に千葉から来てよという打診によくも快い返事をしてくれたもんだと(笑)結果的に初回、102名という大勢のアングラが集まる「忘年会・大親睦会」となったのだ。多くの「繋がり・笑顔」の第歩がここで始まり、思い出として深く刻まれたんじゃないかな。

2012年11月、第5回をファイナルとして、S.W.A.P.に区切りを付けた。5年間刻み込まれた「思い出」がとてもなく大きく、繋がれた人と人との時間は掛け替えの無いものになり、僕が始めに思っていた「隣の人の顔」を皆間近に見ることができたんじゃないかと思う。これから5年、10年先、釣りを続けようが止めていようが、ここで繋がった絆を大切にできれば、今までに無かった何かを得られることは間違いなく、その得られたものは「楽しさ」に繋がって、釣りをしているホントに良かったな、と思える。そんな様々なキッカケの場を提供するS.W.A.P.に惜しみない協力をしてくれた友達には、ホントに感謝しているし、寂しがり屋の僕の釣り人生にとって無くてはならない存在になったのだ。メーカーにも同じことを感じてもらえる人が多くいる。これがこれからの釣り人皆の絆の支えになっていくんじゃないかな?

こうやって改めて「釣り」と「人生」という時間を振り返れば、何処であるかが、誰とだろうが、釣りをしている最中はもちろんであるが、そこに至るまでの準備の時間や、アフターのお酒の時間も含めて「笑顔になる」という幸せを釣りに通じて教えてくれた親父に感謝かな?面と向かっとなかなか言える事じゃないので、ここで伝えよう。ありがと!そしてこれまで築いてきた「繋がり」がファイナルを迎えたS.W.A.P.で終わることなく、ここから始まりなんだと。今からもっと大きく、広く、S.W.A.P.で築けた「絆」を無駄にしないように大切に釣り人生を歩いて行きたいと思う。